

銀の皿

「明け渡す祈り」



高校生の私は柔道部で体格も良く、自分と同じ体重のバーベルを持ち上げ、黒帯で二段でした。だから怖いもの無し…というわけではなく、とても劣等感の強い人間でした。実際の自分は常に人から評価される事を恐れていました。(当時の)流行も知らない、スマートでもない、そしてモテナイ。とコンプレックスのカタマリでした。学校でもどこでも、近くで自分の知らない集団が笑っている光景を見る時に、「みんな俺の事を見て笑っている」と被害妄想気味でした。教会に行ってイエス様を信じて、たくさん奉仕をするようになって、その点についてあまり変わりませんでした。人と関わる事、お話しする事を、ついつい避けがちでした。たくさんのお恵みや愛を神様から受け取っても、「どうせ自分は劣っている」という考えから長い間、抜け出せず、人からその烙印を押される事を恐れていたのです。

ある時、「そんな自分を変えたい、もっと人と自信を持って話したい」とお祈りした時、神様からのはっきりした声を聞きました。それは「そんなお前を用いたい」という言葉でした。正直なところ、神様は「そんなお前」とか「こんなお前」とかいう方ではありません。その神様の言葉の意味は「そんな風に劣等感を抱いている君を私は愛している」「こんな自分は役に立たないと思っている君を、私は福音のために働いてほしいと思っている」「君は役に立たない者ではない。私は私の計画があってあなたを遣わすつもりである」という意味でした。「これから君は私(神様)の名前の為に馬鹿にされたり見下されたりするかもしれない、でも私はそんなことを絶対にしない、私がいつも一緒にいるから私の事を伝え続けてくれ」そんなたくさんの意味を一言にまとめて私に伝えてくれたのでした。その言葉は私にとって十分な答えでした。「こんな風に思ってくれる方のために働きたい」私は

ザアカイのように立って、私の生涯を主にお捧げするお祈りをしました。そして今、私はこれでもかというほど(様々な場面で)多くの人前に出る働きをしています。主のお名前を広げるためです。

私達は時折、信仰生活の中で明け渡せずに握りしめ続けてしまうものがあります。人からは見えなくても神様は見ています。劣等感だったり、名誉だったり、怒りだったり、心の傷だったり、疑いだったりします。少し踏み込んだことを書きますが、私達の人生のトラブルはその明け渡せないものが原因だったりします。だから同じような事を繰り返す自分に、失望したりします。私も時折、代り映えしない自分に嫌気がさします。しかしそんな私を支え続けている言葉が「そんなお前を用いたい」という神様の言葉です。この言葉(約束)があるから、私は今の働きをすることが出来ています。私達はそれぞれに握りしめている聖句があります。又、主は新たに語り掛けて下さろうとしています。それらは私達にとってかけがえのない言葉です。神様には計画があり、一人一人を用いる計画があります。それは有能だから選ばれたわけではありません。私達は神様に愛されているから、この福音宣教の働きに立てられたのです。信仰のお話として、私達が手に握りしめる事が出来るのは一つだけです。一番大切な物を握りしめるために、今、手の中にあるものを神様にお渡ししましょう。何にも勝る祝福が私達を待っています。そして私達の必要は全て満たされます。共に主を仰ぐ者となりましょう。

